

## 秀松も参加した岩手・江刺郡地質調査

賢治は、盛岡高等農林では農学第二部(農芸化学)で関豊太郎教授の指導の下、各地の地質調査に参加していました。賢治の専門は土壌学だったし、稲作の指導だけでなく、花壇の設計なども沢山している。ガーデニングの専門家でもあったわけです。最初の地質調査は、1916(大 5)年の盛岡地方地質調査ですが、さらに東京でのドイツ語講習の後も、関教授の指導の下、埼玉県秩父、長瀬、三峰地方の地質調査にも参加しています。

翌 1917(大 6)年ですが、同じ関教授の指導で、江刺郡の地質調査が行われ、賢治も参加することになりました。高等農林に首席で入学して、特待生にも選ばれていた賢治は、度重なる土質調査に参加協力していたからでしょう、関教授から地質調査の参加者の推薦を依頼されます。賢治の念頭には、すぐ東京でドイツ語の講習にも一緒に参加し、日頃から盛岡周辺の山野を案内していた無二の親友、高橋秀松の名前が浮かびました。ただ、秀松は農学第一部(一般農学、農政経済)だから地質の専門ではない。

賢治と秀松の二人は、同寮で生活し、山野を跋涉して交友を深める中で、専攻研究科目についても、話し合ったそうです。「偶然にも二人とも盛岡高農を志願した根本の動機は、東北農民から最もおそれられている夏の寒冷の害を除いて暗い冬を無くそうという点で合致していたので、結局は二人で分担を決め互いにその専門を究めて目的を達成しようと話は一決したのであります。それで賢治は、土壌、肥料の面から、開花、稔実の時期をその年の気象条件に合わせて、冷害から護ることを研究眼目とすることとし、私は、稲の品種を改良して、冷害に強い、新品種を育成し、且寒冷による稲の病害を、予防駆除する為、植物病理学をも専攻に加える事にした。」(高橋秀松「宮沢賢治の人間像」『七十七』No.81、昭 39 年)

ここまで二人が話し合っていた以上、賢治は秀松の調査チーム参加を希望し、関教授に強く推薦したに違いありません。二人は共通の研究目的のために地質調査に参加し、その成果に満足していたようです。もう一人の同行者は、地元の一関出身の佐々木又治(農芸化学)でした。この江刺の調査の対象は、「種山が原」をはじめ、「風の又三郎」など、賢治の童話や詩歌の舞台になった地域の豊かな自然と農民達でした。そこで、<「風の又三郎」の「又」はどこから来たか—その謎を推理する>として、「一つの試案」も提示されています。ここにも、佐々木、秀松の二人の同行者の名前の挙がっている点は興味を惹かれます。

